

Title	内モンゴル人日本語学習者を対象とした格助詞学習法の開発
Author(s)	韓, 薩如拉
Citation	
Issue Date	2018-09
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/15443
Rights	
Description	Supervisor: 由井 蘭 隆也, 先端科学技術研究科, 修士 (知識科学)

修士論文

内モンゴル人日本語学習者を対象とした格助詞
学習法の開発

1610426 HAN, Sarula

主指導教員 由井 蘭 隆也

審査委員主査 由井 蘭 隆也

審査委員 内平 直志

西本 一志

キム ウニョン

北陸先端科学技術大学院大学

先端科学技術研究科

平成 30 年 8 月

Learning Material of Japanese Particle for Japanese Learning in Inner Mongolia

SARULA HAN

School of Science of Technology
Japan Advanced Institute of Science and Technology
September 2018

Keywords: Mongolian, Development of Education materials,
Japanese Learners, Grammar Comparison

Although Mongolian and Japanese languages have a lot of similarities, the Mongolian version of the Japanese textbooks studied by Japanese learners in inner Mongolia is a big obstacle, sometimes not available at all. In this study, teaching materials are developed in Mongolian for the example case of Japanese particles. This study conducts an evaluation experiment of the usefulness of the style of the developed material.

When developing the teaching materials, this study conducted remote surveys, field surveys and textbook surveys for both Japanese and Mongolian languages. The target of the surveys are Japanese learners from the Autonomous Region of Inner Mongolia.

With the traditional Mongolian writing style is vertical from left to right, the results of the questionnaires show that the most difficult problems for Japanese learners are based on the contents of textbooks. We focus our study on Japanese particles "に", "で", "を" and "が". We conduct evaluation experiments to confirm how much the Japanese teaching materials written by Mongolians

can improve and support Japanese learners in Mongolia.

With the questionnaires, the evaluation experiments conduct pre-tests and post-tests before and after studying from the textbook and material we prepared about the usage of the Japanese particles "に", "で", "を" and "が". The results of the experiments are obtained by web questionnaires sponsored by Tencent (China) questionnaire online website.

The results showed that a tendency to raise or lower the test results, maybe an adequate learning efficacy could not be obtained. On the other hand, according to the result, we've known the fact that about 50% of learners will feel easy to learn Japanese by using the textbook written by their mother tongue (Mongolian).

From the above, it was found that make improvements to the Mongolian version Japanese textbook is necessary.

In future word, we will make a research of which patterns are misused with high frequency and make revisions and improvements of Textbooks. Especially, it is one of the tasks to focus on the example where the score drops. Also, we would like to participate in the opinions entered on the questionnaire and aim at revising and improving teaching textbooks by adding some detailed explanations such as selecting some good example sentences and correspondence diagrams.

図目次

図 1-1	モンゴル語と日本語の対比.....
図 2-1	日本語の「ニ格」とモンゴル語の「向位格」の比較.....
図 2-2	日本語の「デ格」とモンゴル語の「造格」の比較.....
図 2-3	日本語の「ヲ格」とモンゴル語の「対格」の比較.....
図 2-4	日本語の「ガ格」とモンゴル語の「格がない事例 (ø)」の比較.....
図 3-1	日本語の難解項目.....
図 3-2	学力調査.....
図 3-3	授業中の様子.....
図 4-1	「に」と「 нэг 」の指導内容.....
図 4-2	「で」と「 орно, хэрхэн 」の指導内容.....
図 4-3	「を」と「 ийн, ы 」の指導内容.....
図 4-4	「が」と「 Э 」の指導内容.....
図 6-1	日本語学習期間.....
図 6-2	考え順番.....
図 6-3	助詞に関する理解度.....
図 6-4	教材の理解度.....
図 6-5	教材のわかりやすさ.....
図 6-6	習得が難しい格助詞の項目.....

表目次

表 2-1	日本語とモンゴル語の対応関係.....
表 2-2	日本語の格助詞とモンゴル語の格の用法対比.....
表 2-3	日本語の「に」「で」「を」が」とモンゴル語の格の用法対比.....
表 3-1	現地調査結果.....
表 4-1	日本語の格助詞とモンゴル語の格の用法対比.....
表 4-2	日本語の「に」「で」「を」が」とモンゴル語の格の用法対比.....
表 4-3	教材の構成.....
表 5-1	実験テスト難易度レベル評価.....
表 6-1	事前テスト (Q1-Q20) の点数.....
表 6-2	事後テスト (Q1-Q20) の点数.....
表 6-3	事前テストと事後テストの平均点及びその差.....
表 6-4	事前テストと事後テストの誤解率.....
表 6-5	事前テストと事後テストの点数の X 2 乗検.....
表 6-6	相違点が見られる格助詞の分類.....
表 6-7	向上した例文について.....
表 6-8	向上してない例文について.....

第 1 章 序論

1.1 研究背景

中国では中国語が標準語として使われるため、内モンゴル自治区に住むモンゴル民族（内モンゴル人）は中国語を勉強する共に、自分の民族言語（モンゴル語）についても勉強する[1]。幼稚園から博士の教育に至るまでモンゴル語で授業をする体制が整えられている。その中、外国語である日本語学習者が増加している。国際交流基金の調査によれば、2015 年の内モンゴル地域には正規な日本語学校機関は全部で 44 である[1]。中高等学習者を含め、日本語の学習者は全部で約 11523 人、うちその多くはモンゴル族（約 67%）であるという[2]。

また、大学では日本語が第二言語として選択する項目の一つであり、モンゴル人日本語学習者の五割が日本語を選択している[4]。日本語を選ぶ主な理由としては、モンゴル語と日本語は似ているところが多く、語順も同じく、発音もモンゴル人にとって難しくないと言っていた。また、中国語ができるため、漢字がある単語を覚えるのに役に立つと言われている[1]。

日本語とモンゴル語は同じく SOV 言語で、語順と文法規則には類似点があると知られている(図 1-1) [3]。例を挙げてみると、「私はモンゴル語を学ぶ」という文章には、日本語とモンゴル語において格助詞が文法関係や意味役割の表示に深く関与し、文法の中心的役割を担っている。故に、内モンゴル人日本語学習者にとって、日本語は学びやすい言語であると言われている。しかし、第二言語習得では、母語の干渉が起こることが知られている。日本語教師は日本語を教える際に、学習者の母語と日本語との間に見られる相違点を理解した上で、日本語を教えることが期待される[5]。

<u>ᠰᠢ</u>	<u>ᠲᠤ</u>	<u>ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ</u>	<u>ᠤ</u>	<u>ᠰᠤ</u>	<u>ᠰᠠᠭᠤᠨᠠᠭᠤ</u>
<u>私</u>	<u>は</u>	<u>モンゴル</u>	<u>語</u>	<u>を</u>	<u>学ぶ</u>
<u>主語</u>	<u>助詞</u>	<u>修飾語</u>	<u>被修飾語</u>	<u>助詞</u>	<u>補語</u>

図 1-1 モンゴル語と日本語の対比

鈴木忍（1978）は外国人が日本語を学ぶ際に特に誤りやすい文法の一つは助

詞であると主張している[7]。日本語の助詞は、他言語にはあまり類例を見ないものである、教える側にとっても、教わる側にとっても、やっかいなものであることは事実である。例えば、助詞「は」と「が」の使い分けは非常に難しいであり、どんな場合に「は」を使い、どんな場合に「が」を使いかを混乱する。また、同じく場所を表す「に」と「で」と「を」にはどんな違いがあるかについても答えられないのはふつうであると述べられている[7]。さらに日本語の格助詞とモンゴル語の格との対応は多対多、一対一、対応なし、の3種が存在することが分かる[8]。その中でも、特に多対多の関係にある格助詞「に」「で」「を」の説明が重要であり、使用方法の差異を示した。助詞「に」に対応するモンゴル語は与位格 ᠡᠨᠡ 、造格 ᠡᠭᠡ 、奪格 ᠡ᠋ᠭᠡ と対応なしと四つの役割を分担する。助詞「で」の用法はモンゴル語の与位格 ᠡᠨᠡ 、造格 ᠡᠭᠡ 、或は助詞を省略することが多い。助詞「を」はモンゴル語では 対格 ᠡ᠋ᠭᠡ 以外に奪格 ᠡ᠋ᠭᠡ 、与位格 ᠡᠨᠡ 、造格 ᠡᠭᠡ と対応なしと五つの関係が認められる。格助詞「の」はモンゴル語の ᠡ᠋ᠭᠡ 、格助詞「と」は ᠡ᠋ᠭᠡ 、格助詞「から」は ᠡ᠋ᠭᠡ 、格助詞「が」は対応なしと関係になる。即ち、日本語の格助詞とモンゴル語の格と一致するものあれば、格助詞「を」「で」「に」のようはかなり異なるものがある。

李(1998)は過去に日本語との対照研究が行われてきているが、内モンゴルにおける日本語学習教材は中国語で書かれているものが主流であり、適当な日蒙辞書がない、モンゴル語で書かれた教材はほとんど開発されていないのが現状であると指摘している[6]。また、森(2007)はモンゴル母語話者が学びやすい教科書が作成される必要性を述べている[9]。しかしながら、このような教材は実現されていない。初級、中級ともに中心となっているのは、中国で広く用いられている『標準日本語』シリーズである。他にも『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)の中国語版である『大衆的日語』、『新世紀大学日語』、『新編日語』も用いられている。

以上より、モンゴル語話者のための日本語教科書としてモンゴル語による日本語教材を開発する共に、格助詞に注目することにした。

1.2 研究目的

本研究では、助詞の中で学習が困難であるとされる格助詞に注目し、初級レ

ベルの学習にも分かるような格助詞の補充教材を開発する。

第二言語習得では、母語と第二言語・外国語の違いが大きいと習得は困難であり、少ないと容易であると述べている。このような対照分析研究に基づき、モンゴル人学習者に対して、有益な学習教材を開発する為に、両言語（日本語とモンゴル語）における格助詞についての文法知識を整理した上で、モ日文法対比学習法を用いた研究をする。

この研究結果により、内モンゴル人学習者に対する日本語の格助詞教材を提供することが期待され、文法比較による開発が有益であることを検証する。

1.3 本論文の構成

第1章では、本研究の背景と目的について述べる。第2章では、本研究に関連するモンゴル語の格助詞と文法比較について述べる。第3章では、内モンゴル自治区における状況調査及び文法調査について述べる。第4章では、モンゴル語版日本語格助詞教材の設計と開発について述べる。第5章では、得られたデータの評価について述べる。第6章では、評価結果と考察について述べる。第7章では、本研究の結論と今後の課題について述べる。

第2章 モンゴル語の格助詞と文法比較

2.1 緒言

先行研究[10][11]により日本語の格助詞「に」「で」「を」「が」の学習に関連する知識を示す。本研究に取り上げた日本語の文章例の大部分は、「みんなの日本語」でよく挙げた例を主に用いたものである。その文章をモンゴル語に訳し、文法解説を加えたものである。

2.2 モンゴル語の格助詞

2.2.1 格助詞「に」について

日本語の格助詞「に」の用法はモンゴル語の与位格 сэ, -тэй でたいてい同じように使用される。そのため、すべての用法をそのまま使い変えると、誤解を起こすことが多く見られる。

(1.1) 具体物の存在場所

「彼は大阪に住んでいる」

「家に父がいる」

ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠪᠡᠢ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ

ᠠᠭᠤ ᠠᠵᠤ ᠠᠵᠤ ᠠᠵᠤᠨ

格助詞「に」の「具体物の存在場所」を表す用法はモンゴル語の与位格 сэ, -тэй の用法と一致する。しかし、「動作・作用の行われる場所」を表すモンゴル語の与位格 сэ, -тэй に相当する日本語の「で」との間違いが非常に多く見られる。例えば、「住む」という動詞には、「に」によって表示される場所を目的語とし、「で」によって表示される場所を状況語とし、文章に繋がる。従って、「住む」という動詞はモンゴル語において「生活する」「暮らす」など意味に近く、与位格 сэ, -тэй の意味を持ち「で」か「に」かと混同しやすく、注意しなければならない。

(1.2) 抽象物の存在場所

「どこに行きますか」

「かばんはここに置いてください」

ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ

ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ

モンゴル語では抽象物の存在場所を表す「に」格に相当する格は存在しない。つまり、省略することがモンゴル人学習者に多く見られる。

(2) 到着点・帰着点

「家に帰る」

「会議に出席する」

ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ

ᠠᠵᠤᠨ ᠠᠵᠤᠨ

帰着点を表す「に」の現れる表現という、「何か」が「ある位置」に、或いは「ある状態」に「移る」というものである。また、帰着点を表す「に」を取る動詞としては、「行く」「帰る」「出発」「出席」など数多くある。モンゴル語には、「帰る」「行く」など動作の進行方向を表すに日本語の格助詞「へ」を使い、即ち与位格 へ ・ へ である。そのため学習の初期の段階では、「に」と「へ」の用法が混乱になりやすいからである。

(3) 受け取り手

「子供にお菓子をあげる」

「恋人に指輪を買う」

$\text{ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠤ ᠭᠣᠨᠢᠨᠠᠨ ᠠᠨ ᠤᠨᠠᠨᠢᠨᠠᠨ}$

$\text{ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨ ᠤᠨᠠᠨᠢᠨᠠᠨ ᠠᠨᠢᠨᠠᠨ ᠠᠨᠢᠨᠠᠨ}$

格助詞「に」の受け取る用法とモンゴル語の与位格 へ ・ へ の用法と一致する。

つまり、間違えることはほとんどない。

(4) 相手

「恋人に会う」

「先生に聞く」

$\text{ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨ ᠤᠨ ᠠᠨᠠᠨᠢᠨᠠᠨ}$

$\text{ᠤᠨᠠᠨ ᠠᠨ ᠤᠨ ᠠᠨᠠᠨᠢᠨᠠᠨ}$

「恋人に会う」の「に」格はモンゴル語では共同格 ᠠᠨᠠᠨ に相当する。つまり、日本語の「と」格に対応する。日本語でも「と」格と可変であることを考えれば、モンゴル語学習者にとってさらに難しくなる。類似・比較などの基準を表すのには「と」が用いられることもあるし、「に」が用いられることもある。どちらが用いられるかは、あとにくる語との関係によるところが大きいようである[11]。また、「先生に聞く」の相手を示す「に」助詞はモンゴルでは、方向性の強く誰から得る「から」助詞と同様に使われる。即ち、日本語の相手を表す「に」格助詞はモンゴル語では、奪格 ᠠᠨ と共同格 ᠠᠨᠠᠨ 2つに表現できることが分かる。

(5) 対象

「提案に賛成する」

「壁に靠れる」

上の例において、日本語の対象を表す「に」格はモンゴル語には相当するものがない。そこで、このような「に」を教える際に工夫する必要がある。

(6) 原因

「酒に酔う」

「恋に悩む」

ᠠᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤ

ᠠᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤ

原因を表す「に」格はモンゴル語では与位格 ᠡᠨᠢ に表現するため、見違えるころはあまり見られない。

(7) 方向・目的

「服を買いに行く」

「泳げに行く」

ᠠᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤ

ᠠᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤ

目的語を示す「に」格助詞に「行く」「来る」「帰る」「出かける」など移動動詞が付く場合が多く、日本語の方向性を表す「へ」と混乱しやすい。また、方向・目的を表す「に」助詞はモンゴル語では造格 ᠡᠨᠢ の意味を持ち、「で」格助詞とも混乱する場合が見られる。つまり、文章にくる動詞の言葉意味により格表示が違ふことが分かる。例えば、「に向かう」の直前に置かれた「に」はモンゴル語では対格 ᠡᠨᠢ であり、「に走る」の「に」格はモンゴル語では与位格 ᠡᠨᠢ で表す場合がある。

(8) 事態の時・順序

「5時に会議がある」

「山田が最後に着いた」

ᠠᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤ

山田 ᠠᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤ

時間の用法を表す「に」格はモンゴル語と日本語は同じくように使われ、問題が生じないようである。

2.2.2 格助詞「で」について

日本語の「で」格に相当するモンゴル語のでは位格 **өө**・**оо**、造格 **оо**・**оо**、或は助詞を省略すると4つに表現できる。場所を表す「で」格はモンゴルでは与位格 **өө**・**оо** で表示されることが多い。

(1) 動作・出来事が行われる場所

「図書館で勉強する」

「海で泳ぐ」

Тол / ын / ыг / өд амьсгал

Амьсгал өд тосгоо

場所を表す「で」格はモンゴル語で与位格 **өө**・**оо** で示すことが多い。しかし、例外も少なくない。例えば、

「会社で会議があった」

「工場で事故があった」

Өмнөд өд шүүхтэй оос өлсөөр

Уулд / ын / ыг / шүүхтэй оос өлсөөр

例をモンゴルで直訳すると「会社 上 会議があった」となる。場所を表す名詞が変わるだけで表現が異なるので、ニュアンスで判断したうえで表示せざるを得ない。これがモンゴル人日本語学習者にとって大きな困難であると思われる。

(2) 手段・道具・方法

「日本語で書く」

「列車で帰る」

Хэл / ын / өс / бичих

Хүлээг өснийг өс буцаах

手段・道具の意味を表す「で」格はモンゴル語では造格 **оо**・**оо** の意味で使われ、日本語の「で」格の使い用法と全く同じく、問題はない。

(3) 材料

「木で紙を作る」

「麦でビールを作る」

Хүдс өс хуурайх

Хүдс / ын / ыг / хуурайх

「で」格にも「から」格にも原料・材料を表す用法があると言われている。モンゴル語では、「から」助詞は造格 **оо**・**оо** と奪格 **на** と二つの意味を持ち、学習者にとって区別するのに難しい。「で」は材料を表す、「から」は原料を表す特徴を持ち、区別して教えるべきではないかと思う。

(4) 原因・理由

「病気で学校を休む」

「大雨で電車が止まる」

Хүдс / ын / ыг / хуурайх

Хүдс / ын / ыг / хуурайх

原因や理由を表す日本語の「で」格は、モンゴル語では奪格 **на** と造格 **оо**・**оо** で表示される場合が多い。ただし、モンゴル語には、原因・理由を表す意味を

持つ格は「から、一ため、せいで、理由で」など存在する。例えば、「病気で学校を休む」と例文を日本語に直接すると「病気のためから学校を休む」となる。つまり、「N の原因・理由から V」という文型となり、奪格 *hag* か造格 *na* かを意識して判断する必要がある。

(5) 範囲

「一日で仕事を終える」 「三時間で読み終わる」

hag *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na*

hag *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na*

日本語の範囲を表す「で」格はモンゴル語の与位格 *na* の用法に対応し、相違点は見られない。

(6) 限度

「5時で締め切る」

na *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na*

日本語の範囲を表す「で」格はモンゴル語の造格 *na* の用法に対応し、相違点は見られない。

(7) まとまり・動作主

「全員で映画を見に行く」

「みんなで料理を作る」

na *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na*

na *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na* *na*

格助詞「で」のまとまりの用法はモンゴル語では造格 *na*、或は助詞を省略することが多い。そのため、格助詞脱落の誤りが学習者に多く見られる。

2.2.3 格助詞「を」について

日本語の「を」格は動作・作用の対象を表す用法により、モンゴル語では通常格不要の形をとる。ただし、「出る」「降りる」など方向性の起点・出るとこ

(1) 動作・作用の対象

「本を読む」

15 10446

また、「を」格がモンゴル語で表示される際、次のように特徴を持っている。

「私はあなたを嫌うことができません」

[illegible]

(2) 動作の方向

「彼女の方を見る」

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

(3) 可能・願望

「日本語を話せる」

שְׁמִי אֵל אֱלֹהִים

14

「夏休みを日本で過ごした」

ସର୍ବ ମହାନାଟକ ସାଧୁ ୨୫ ଡିସେମ୍ବର

የሚገኝበት የጥቅም ስራ ስለሚፈጸም

日本語で期間を表す際に格助詞「を」取ることに對してモンゴル語では通常格不要の形である。しかし、対象をはっきりさせるためには對格 $\text{r}\bar{\text{u}}$ ・ u を取ることもある。

(5) 起点

「車を降りる」

「部屋を出る」

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

102207 12/1 102208

日本語では出発の起点を表す助詞は「を」「から」と二つの使い方が存在する。しかし、同じ例文においても格異なる場合での文章は違ってくる。

例えば、「学校から出発する」と「学校を出発する」では、「から」を用いた文章は不自然である。

「出る、降りる」など方向性の強い動詞を使う場合、モンゴル語では奪格 **ᠠᠨᠤ** を用いて表現する。あるいは、日本語の格助詞「から」になる。

(6) 移動の経路・動作の場所

「道を走る」「廊下を走る」

ମର୍ଦ୍ଦି ମାରି ଦେଖାଉ ଶିଳ୍ପକର୍ମୀଙ୍କୁ ଚିତ୍ତ ଦେଖାଉ

移動の経路を示す「走る、歩く、飛ぶ」などの動詞を使って経過する場合を表す時には、日本語で「を」格を取るが、モンゴル語の場合は造格 ᠤᠨᠤᠨᠠᠨ 表す。あるいは、日本語の格助詞「で」になる。

このように移動動詞を表す移動動詞であれば「から」は取ることができますが、「を」を取る動詞は「出る」「出発」など区間的な動作を表すものになる。

2.2.4 格助詞「が」について

日本語には主題を示す格助詞「が」と係助詞「は」と二つの助詞が存在する。
[12] モンゴル語において、主格は主格と述語とを結びつけ、主語の後に「」

が付き、「N+ᠤ+V/adj」ような形のものになるわけである。しかし、動詞文 V/形容詞文 adj には何もつかなく、省略する方が多く見られる。

(1) 動作主

「山田がリンゴを食べた」

山田 **ᠰᠠᠳᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ**

モンゴル語に動作主を表す格は存在しない。そのため、学習者は文章中の「が」助詞を省略する恐れがある。

(2) 状態の主体を表す用法

「本に名前が書いてあります」 「春になると花が咲きます」

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

「雨が降った」

「先生が来ました」

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

モンゴル語に状態の主体を表す格は存在しない。そのため、学習者は文章中の「が」助詞を省略する恐れがある。

(3) 状態の対象を表す用法

「水が欲しい」 「水が飲みたい」

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ

このように、「欲しい」「たい」など意欲を表す場合、通常格つかないが、目的を明確化する際に対格 **ᠤᠯᠤᠰ** が用いられる場合がある。

つまり、「誰、何」など疑問詞が主体の場合、日本語は「が」付くに対して、モンゴル語では省略することが多い。要するに、日本語における「主格」は必ず「名詞が」のような形のものであるが、モンゴル語における「主格」必ずしもそうではない。

2.3 格助詞の文法比較

中国のモンゴル族は中国人として漢字を理解でき、さらに蒙日両言語は似ているため、モンゴル人日本語学習者は日本語を他民族の学習者より学びやすい

と思われる。これらを生かしたモンゴル人学習者向けの日本語教科書を作ることとは効果があると考えられる。

そのため、「に」「で」「を」「が」四つの項目を対応する・対応なしと分類したうえで、両言語の違うところを学習者に指導したら良いのかと考え、「みんなの日本語」を分析した。以下は、両言語の誤用を避けさせるための指導方法を経験に基づいて述べることにする。

(1) 最初に、日本語でもモンゴル語でも同じく使用方法として扱われている例即ち、対応する例を直訳で教えれば、初級学習者にもすぐに理解できる項目である。

(2) 次に、日本語に存在するに対し、モンゴル語には存在しない例の場合、モンゴル語にはないため、それを全部覚えなくてはいけない。

(3) 日本語の助詞はモンゴル語に存在するが、一つの格が複数の形に変化する場合、二つの言語の構成要素を留意し、規則を理解する必要がある。

この様に、「に」「で」「を」「が」を三つに細かく分析し、比較対照する方法で学習効果があると予想する。

モンゴル語 との関係 日本語の格	対応する	対応なし	一体複数
に	○	○	○
で	○	○	○
を	○	○	○
が		○	

表 2-1 日本語とモンゴル語の対応関係

教室 <u>に</u> 王さんがいます ᠤᠭᠤᠰᠠᠩ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ	対応できる例 <u>ᠤᠯᠤᠰ</u> が「に」に対応
庭 <u>に</u> 花が咲いている	対応できる例

ᠠᠨᠠᠭᠤᠨᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ が「に」に対応
馬 <u>に</u> 乗る	対応しない例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ 《空白》 ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	「に」に対応する文字がない
朝六時 <u>に</u> おきます	対応できる例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ が「に」に対応

図 2-1 日本語の「ニ格」とモンゴル語の「向位格」の比較

三人 <u>で</u> 町に行きます	対応しない例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ 《空白》 ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	「で」に対応する文字がない
モンゴル語 <u>で</u> 手紙を書きます	対応できる例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ が「で」に対応
山の上 <u>で</u> 写真を撮る	対応できる例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ が「で」に対応
地震 <u>で</u> 家が壊れた	対応できる例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ が「で」に対応

図 2-2 日本語の「デ格」とモンゴル語の「造格」の比較

橋 <u>を</u> 渡る	対応しない例
ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ 《空白》 ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ	「を」に対応する文字がない
教室 <u>を</u> 出る	対応できる例

ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ	ᠤᠯᠤᠰ が「を」に対応
弟を泣かせました	対応できる例
ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ	ᠤᠯᠤᠰ が「を」に対応
薬を飲む	対応しない例
ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ 《空白》 ᠤᠯᠤᠰ	「を」に対応する文字がない

図 2-3 日本語の「ヲ格」とモンゴル語の「対格」の比較

山田がリンゴを食べた	対応しない例
山田 ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ	「が」に対応する文字がない
雨が降った	対応しない例
ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ	「が」に対応する文字がない
水が飲みたい	対応しない例
ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ	「が」に対応する文字がない
水が飲みたい	対応できる例
ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ	ᠤᠯᠤᠰ が「が」に対応

図 2-4 日本語の「ガ格」とモンゴル語の「格がない事例 (ø)」の比較

2.4 結言

本章ではモンゴル語の格助詞について述べると先に、日本語の格助詞との違いについて説明した。

第3章 内モンゴル自治区における状況調査

3.1 緒言

教材を開発するにあたり、学習内容の選定が必要となる。そのため、本研究では内モンゴル自治区の日本語学習者を対象にそれぞれ、遠隔調査、現地調査、教科書調査を行った。

3.2 内モンゴル人を対象とした遠隔調査

初めに、格助詞の学習困難さを確認するため、モンゴル人日本語学習者 28 人を対象に日本語文法項目アンケート調査及び助詞に関する学力テストとの二段階で行った。調査は中国の腾讯问卷(web サイト)によるアンケート方式で、2017 年 5 月に実施した。調査の対象者である 28 人の日本語のレベルは初級から中級で、大学生は 11 人、博士課程学生は 17 人である。

(1) アンケート調査について

調査結果、品詞の中での助詞を難解と解答した学生は 58%であり、他の項目より高いことが分かった。図 3-1 にまとめた。

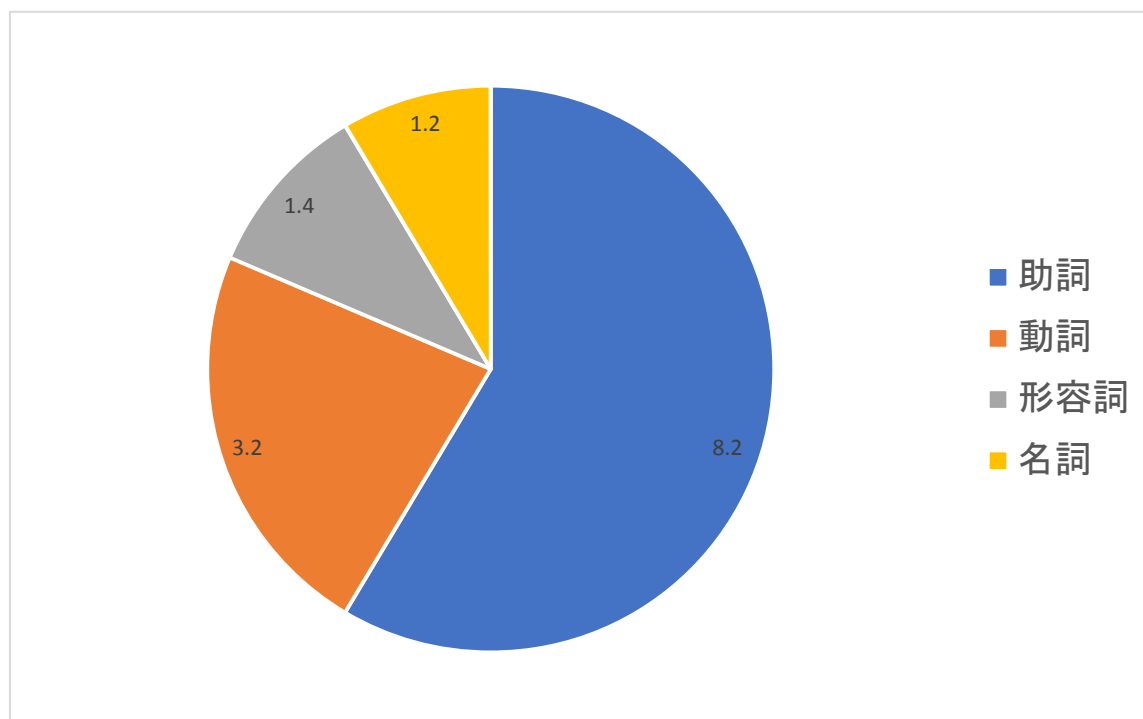


図 3-1 日本語の難解項目

(2) 格助詞に関する学力テストの結果について

また、アンケート調査の結果に基づき、日本語の助詞を対象とした試験問題を作成して学力調査を行った。比較的に格助詞を中心に 35 問出題し、成績に点数をつけ評価した。

調査結果は、「の、へ、と、から」などが正解率が高い。一方、「に、で、を、が」の点数が低いことが分かった。図 3-2 にまとめた。

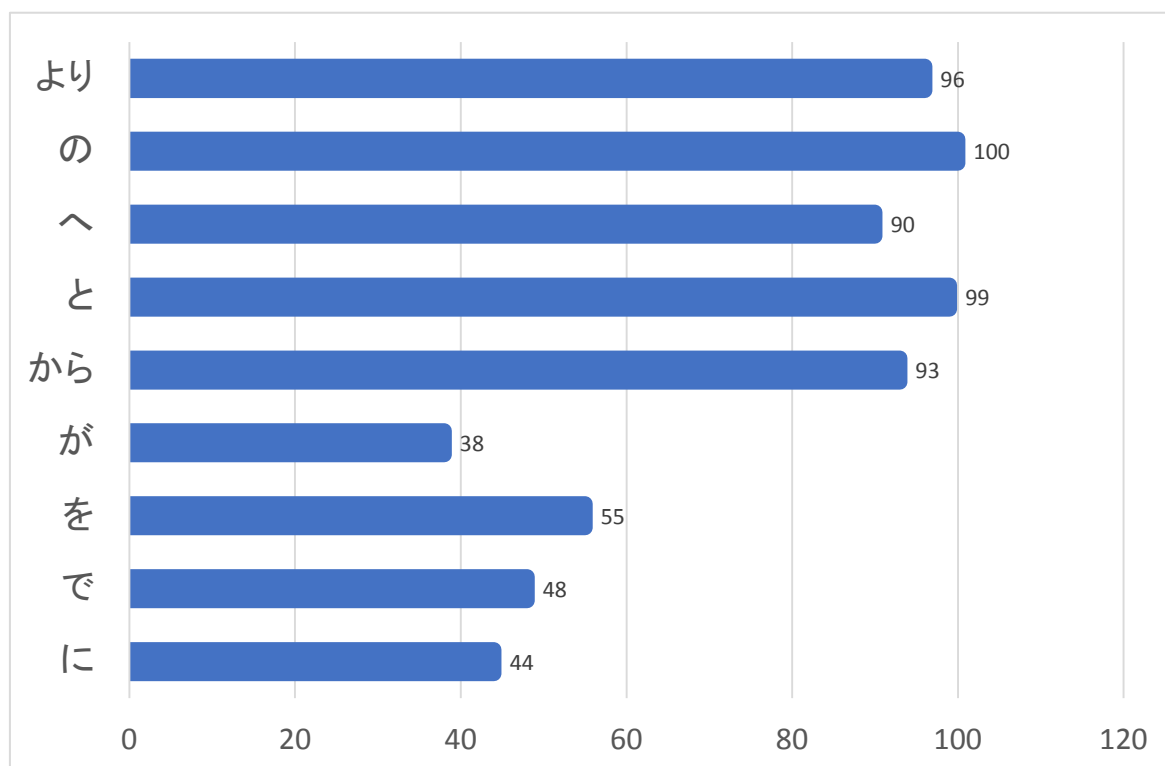


図 3-2 学力調査

3.3 内モンゴルでの現地調査

現時点では、モンゴル族の日本語学習者にどのような方法で日本語を教えているのを把握するため、現地調査を行った。2017年10月に、内モンゴル自治区にある財經大学にいき、授業に参加し、録音した。授業はモンゴル語で行われ、使用されている教科書は日本語版である。調査の対象者である内モンゴル人日本語学習者、22人全ては大学4年生で日本語のレベルは初級から中級である。

(1) 授業中の様子



図 3-3 授業中の様子

注：中国の内モンゴル自治区では、伝統的な縦書きモンゴル文字が使用されている。一方、モンゴル国ではロシア語のキリル文字が使用されている。黒板で表記されたのは伝統的な縦書きモンゴル文字になる。

(2) 内モンゴルにおける日本語の教科書について

モンゴル語で教材を作るに当たって、皆に良く知られている教材「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」を分析した。内モンゴル自治区では日本語専攻の有する高等教育機関は16ヶ所あり、そのうち6か所の学校の日本語学習者と協力し、調査を行った。内蒙古民族大学，赤峰学院大学，内蒙古师范大学，内蒙古财经大学，内蒙古农业大学，内蒙古大学の学生それぞれ3名で、合計18名である。

内容としては、《みんなの日本語Ⅰ》、《みんなの日本語Ⅱ》の各課の文型と練習Aを注目し、項目ごとの文章を分析した。実験の協力者と中国のWECHAT (web サイト) によるアンケート方式で、2017年5月に実施した。その結果、助詞という言葉自体が使用されていない。また、助詞についての全体像が分かる「まとめ」はなかったということが分かった。

3.4 内モンゴル日本語学習者向けの日本語教科書への要求項目

アンケート調査、現地での授業参加、教科書より得られた日本語教科書への要求項目は次の通りである。

- (1) 母語であるモンゴル語で書かれた教科書が望まれる。
- (2) 格助詞「に、で、を」, 及び「が」について説明が必要である。
- (3) 日本語とモンゴル語を対比し、説明することによりモンゴル語話者に日本語の格助詞を教えれば学習効果があると考えられる。

3.5 結言

本研究では教材を開発するにあたり、内モンゴル自治区の日本語学習者を対象にそれぞれ、遠隔調査、現地調査、教科書調査を行った。そして日本語教科書への要求項目を設定することができた。

格	用法	日本語例文	モンゴル語の格
に	人・物の存在場所	彼は <u>大阪</u> に住んでいる	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
	到着点・帰着点	<u>家</u> に帰る	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
	受け取り手	子供 <u>に</u> お菓子をあげる	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
	相手	先生 <u>に</u> 聞く、恋人 <u>に</u> 会う	奪格 ᠡᠭᠦᠨ 共同格 ᠡᠭᠦᠨ
	対象	<u>提案</u> に賛成する	対格 ᠡᠭᠦᠨ
	原因	酒に酔う	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
	方向・目的	服を <u>買い</u> に行く	造格 ᠡᠭᠦᠨ
	事態の時・順序	5時 <u>に</u> 会議がある	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
で	物事・動作の場所	図書館 <u>で</u> 勉強する	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
	道具・手段・方法	列車 <u>で</u> 帰る	造格 ᠡᠭᠦᠨ
	材料	木 <u>で</u> 紙を作る	造格 ᠡᠭᠦᠨ
	原因・理由	病気 <u>で</u> 学校を休む	造格 ᠡᠭᠦᠨ 奪格 ᠡᠭᠦᠨ
	範囲	5時 <u>で</u> 締め切る	与位格 ᠤᠯᠤᠰ
	限度	三時間 <u>で</u> 読み終わる	造格 ᠡᠭᠦᠨ
	まとめり・動作主	みんな <u>で</u> 料理を作る	造格 ᠡᠭᠦᠨ
を	動作・作用の対象	ご飯 <u>を</u> 食べる	格不要/対格 ᠡᠭᠦᠨ
	動作の方向	上 <u>を</u> 見る	格不要/対格 ᠡᠭᠦᠨ
	可能・願望	水を飲みたい	格不要/対格 ᠡᠭᠦᠨ
	期間	夏休み <u>を</u> 日本で過ごした	格不要/対格 ᠡᠭᠦᠨ
	移動の起点	車 <u>を</u> 降りる	奪格 ᠡᠭᠦᠨ
	通りの場所	道 <u>を</u> 走る	造格 ᠡᠭᠦᠨ
が	動作主	山田がパンを食べた	格不要
	状態・現状・存在・変化の主体	雨 <u>が</u> 降った	格不要
	状態の対象	水が飲みたい	格不要

表 4-2 日本語の「に」「で」「を」がとモンゴル語の格の用法対比

4.3 教材の設計について

教材の設計は事前調査分析の結果に基づき、モンゴル語版での日本語教科書を設計・開発した。学習者がより難しいと回答したアンケート結果を元に、格助詞「に」、「で」、「を」、「が」を絞った「内モンゴル人向け蒙日文法対比学習教材」を設計・開発した。

教材の教材の設計として、伝統モンゴル文字によるモンゴル語文章、縦書きで左から右へと記述した。それぞれ格助詞の用法を説明し、その中でも、特に対多対の関係にある格助詞「に、で、を、が」に絞り、説明を行った。特に、四つの格助詞に対して、日本語とモンゴル語での対応関係の有無、及び使用方法の差異を明示した。例えば、「教室に王さんがいます」という文章では、日本語において、場所を示す「に」がモンゴル語の「 ᠤᠨᠤᠨᠠᠭ 」とは全く同じである。しかし、例2「馬に乗る」では、モンゴル語において、「乗る」は他動詞として使用されることによりモンゴル語では「に格」が省略できる。

モンゴル語の教科書[15][16]により、日本語の格助詞がモンゴル語の格に対応していることをモンゴル語により説明の後、対応不可能な用法を例文で解説を行った。ここで、学力テスト(図 3-2)の中から誤用頻度の高い格助詞例文を使った。最後に、学習者が混乱している所を意識させるため、対比図を用いて解説した。また、賽音烏其拉図・塔娜(2013)[17]を参考にした表 4-3 に示す教材構成を作成した。

		に	で	を	が
多 対 多	与位格	1	1	1	×
	造格	1	1	×	×
	奪格	×	1	1	×
	対格	1	×	1	×
対応なし		×	×	×	1
よく間違えるパターン		1	1	1	×
間違わないパターン		1	1	1	×

表 4-3 教材の構成

4.4 結言

本研究で開発した教材は、従来の中国語版での教材と異なっている。それぞれの用法が対応してない、或いは、同じ格でも複数の用法に対応している場合を比較し、解説したものになる。モンゴル人日本語学習者が日本語の学習を行う際、母語であるモンゴル語から類推できる部分はそのままに、用法が多い時に意識し覚えること順番を定めた。

第5章 モンゴル語版日本語教材の評価実験

5.1 緒言

開発したモンゴル語版の日本語教材が、モンゴル人日本語学習者にどの程度支援できるのかを確認するために行った評価実験について述べる。

5.2 実験内容について

5.2.1 実験参加者と実験手順

最初に、実験参加者と実験手順について述べる。次に、教材を評価するために作成したテストについて説明する。

モンゴル語が母語で中国語も話せるバイリンガルの学習者が実験対象とする。中国内モンゴル財政大学の初級レベルの学生 19 名、学位取得ために内モンゴルの日本語学校に通っている博士学生 6 名である。しかし、事前テストと事後テスト両方とも取れた参加者は 18 名、アンケート回答者は 23 名、全ての実験に参加できた人数は 18 名である。

評価実験は開発したモンゴル版での教材を用い、格助詞「に、で、を、が」に関する事前テスト、事後テスト、アンケートに協力し、教材の評価実験を二回行い、中国の騰訊問卷（Web アンケート）を用いて回収した。

(1) 事前テスト 1

20 問の格助詞穴埋め問題を用意した。中国の騰訊問卷を使用して、web 上でテストを行った。10 分間内に回答を入力させた。

(2) 学習

本稿で提案したモンゴル語での日本語教材を 20 分間学習させた。

(3) 事後テスト

20 分間学習させた後に、テスト 2 に進む。同様の形式と難易度で内容が異なる問題を 20 問用意し、中国の騰訊問卷から回答してもらった。同じく 10 分内に回答し回収する。

(4) アンケート記入

実験終了後、参加者に日本語の助詞学習に関するアンケート調査を実施した。モンゴル人語版の日本語教材の使用感や改善点を、項目選択形式及び自由記述形式で質問した。

5.2.2 テスト内容について

事前テストと事後テストの内容について述べる。本実験ではよく使用される日本語の教科書《みんなの日本語》の例を主に用いたが、両言語の相違点をはっきりさせるため、私が作った例も含めれている。それぞれ、格助詞「に」、「で」、「を」、「が」の例を20問挙げた。その内、「を」格助詞に相当するモンゴル語の格は造格 ᠰᠡᠭᠦ᠋ᠨ ᠲᠠᠭᠤ 、奪格 ᠬᠠᠭ 、与位格 ᠰᠡ ᠰᠤ 、対格 ᠲᠠᠭ ᠠ と対応なしの例をそれぞれ一つ、合計で5門を挙げた。「に」格助詞に相当するモンゴル語の格は与位格 ᠰᠡ ᠰᠤ 、造格 ᠰᠡᠭᠦ᠋ᠨ ᠲᠠᠭᠤ 、奪格 ᠬᠠᠭ と対応なしの例をそれぞれ一つ、合計で4門を挙げた。「で」格助詞に相当するモンゴル語の格は造格 ᠰᠡᠭᠦ᠋ᠨ ᠲᠠᠭᠤ 、与位格 ᠰᠡ ᠰᠤ 、奪格 ᠬᠠᠭ と対応なしの例をそれぞれ一つ、合計で4門を挙げた。「が」格助詞は動作主題、状態・存在・変化などの主体を示する場合モンゴル語では省略することが多い。そのため、相当するものがないと扱い、対応なしの例1つ挙げた。また、外国人が日本語を習得する際「に」、「で」、「を」の使い分けを微妙に間違う例をそれぞれ2つ、合計で6問を挙げた。つまり、試験問題は事前テスト20問、事後テスト20問出題した。

富田隆行(1992) [18]により、事前テスト1と事後テスト2の難易度レベルの評価を表5-1にまとめた。

	事前 テスト	事後 テスト	
助詞	数	数	難易度レベル
に	6	6	間違いやすい4+間違いにくい1+間違わない1
で	6	6	間違いやすい4+間違いにくい1+間違わない1
を	7	7	間違いやすい5+間違いにくい1+間違わない1
が	1	1	
合計	20	20	
テスト1とテスト2の難易度レベル、問題順は同じ			

表5-1 実験テスト難易度レベル評価

5.3 結言

本提案システムの有効性を分析するために、内モンゴル自治区の日本語学習者に協力し、実験することにした。次章では、実験の結果を述べる。

第6章 評価結果と考察

6.1 緒言

評価実験から得られたデータを示し、考察する。

6.2 テストの結果と考察

25 人参加者のうち、事前テストと事後テスト両方とも取れた参加者は 18 名の実験結果を分析した。満点はどちらも 20 点満点である。表 6-1 と表 6-2 に実験結果を示す。

テスト 1																						
番号	参加者	q1	q2	q3	q4	q5	q6	q7	q8	q9	q10	q11	q12	q13	q14	q15	q16	q17	q18	q19	q20	Sum
1	学生A	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	16	
2	学生B	1	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	17	
3	学生C	0	1	0	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	15	
4	学生D	0	1	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1	9	
5	学生E	1	1	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	17	
6	学生F	1	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	15	
7	学生G	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	11	
8	学生H	0	1	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	12	
9	学生I	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	10	
10	学生J	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	11	
11	学生K	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	10	
12	学生L	1	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	11	
13	学生M	1	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	11	
14	学生N	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	16	
15	学生O	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	9	
16	学生P	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	1	1	7	
17	学生Q	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	11	
18	学生R	1	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	1	1	0	1	11	
		10	11	7	10	13	5	7	8	8	18	13	15	12	16	13	15	13	6	14	5	12.2

表 6-1 事前テスト (Q1-Q20) の点数

テスト 2																						
番号	参加者	q1	q2	q3	q4	q5	q6	q7	q8	q9	q10	q11	q12	q13	q14	q15	q16	q17	q18	q19	q20	Sum
1	学生A	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	0	1	0	1	1	0	14
2	学生B	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	11
3	学生C	0	1	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	8
4	学生D	1	1	1	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	10
5	学生E	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0	16
6	学生F	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	15
7	学生G	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	0	16
8	学生H	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
9	学生I	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	6
10	学生J	1	1	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	11
11	学生K	1	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	6
12	学生L	1	0	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	0	0	1	1	0	0	1	0	11
13	学生M	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	0	1	1	1	0	10
14	学生N	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	17
15	学生O	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	0	14
16	学生P	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	6
17	学生Q	1	0	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	9
18	学生R	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	7
		13	10	13	8	13	7	13	5	8	17	13	10	4	9	5	13	6	7	15	2	10.6

表 6-2 事後テスト (Q1-Q20) の点数

対応のある検定テストを用い、20 問の正解数について調べた。その結果、テスト 1 の平均点が 12.16 で、学習後のテスト 2 の平均点が 10.61 となり、統計的に有意差なかった。

	平均点	標本分散
一回目テスト	12.16	8.69
二回目テスト	10.61	15.12
一回目と二回目の差	1.55	12.02

$$t(17)=1.850, p<.1$$

表 6-3 事前テストと事後テストの平均点及びその差

また、事前テストと事後テストの誤解率について調べた。その結果、点数が向上した例文は 1, 3, 6, 7, 18, 19 で、点数に差がなかったのは例文 5, 9, 11 で、点数が向上してなかった例文は 2, 4, 8, 10, 12, 13, 14, 15, 6, 17, 20 であった。

Pre	人数	答え		Post	答え
Q1	8 人	に		5 人	に
Q2	7 人	で		8 人	で
Q3	11 人	を、から		5 人	を、から
Q4	8 人	に		10 人	に
Q5	5 人	を		5 人	を
Q6	13 人	で		11 人	で
Q7	11 人	を		5 人	から、へ、を
Q8	10 人	に		13 人	に
Q9	10 人	で		10 人	で
Q10	0 人	を		1 人	を
Q11	5 人	に		5 人	に
Q12	3 人	が		8 人	が、も
Q13	6 人	で		14 人	で
Q14	2 人	に、を、へ		9 人	を、から
Q15	5 人	に		13 人	に
Q16	3 人	で、が、は		5 人	で、と、は、
Q17	5 人	を		12 人	を
Q18	12 人	に		11 人	に
Q19	4 人	で、から、の		3 人	で、から
Q20	13 人	を		16 人	を

表 6-4 事前テストと事後テストの誤解率

学習者の事前、事後テストの X² 乗検定を調べたところ、Q3、7 は $p < 0.05$

であり、Q13、14、15、17は $p < 0.01$ と異なることが確認された

	答え	前	後	
Q 1	に	1 0	1 3	n. s.
Q 2	で	1 1	1 0	n. s.
Q 3	を、から	7	1 3	$p < 0.05$
Q 4	に	1 0	8	n. s.
Q 5	を	1 3	1 3	n. s.
Q 6	で	5	7	n. s.
Q 7	から、へ、を	7	1 3	$p < 0.05$
Q 8	に	8	5	n. s.
Q 9	で	8	8	n. s.
Q 1 0	を	1 8	1 7	n. s.
Q 1 1	に	1 3	1 3	n. s.
Q 1 2	が、も	1 5	1 0	n. s.
Q 1 3	で	1 2	4	$p < 0.01$
Q 1 4	を、から	1 6	9	$p < 0.05$
Q 1 5	に	1 3	5	$p < 0.01$
Q 1 6	で、と、は、	1 5	1 3	n. s.
Q 1 7	を	1 3	6	$p < 0.01$
Q 1 8	に	6	7	n. s.
Q 1 9	で、から	1 4	1 5	n. s.
Q 2 0	を	5	2	n. s.

X 2 乗検定（独立性の検定）

表 6-5 事前テストと事後テストの点数の X 2 乗検

統計結果により、40 問のテストでは相違点が多い「を」格助詞の正しい率が一番高かったが、答えの間違いも一番多かった。そのため、向上した例文と向上していないものと二つに分けて考察する。

に	Q15 ↓
で	Q13 ↓
を	Q3 ↑ Q7 ↑ Q14 ↓ Q17 ↓
が	

表 6-6 相違点が見られる格助詞の分類

向上した例文

向上した二つの例文共は格助詞「を」である。最初に、「部屋を出る」「車を降りる」の例文はどちらにおいても起点を表す「を」と「から」助詞が使用される。モンゴル語においては奪格 *ya* であり、全く同じ使い方を取る。しかし、「へ」助詞も方向性を表す意味を持ち、目的地へ向かうと言い方により、混乱するところが考えられる。また、「彼女の方（を）見る」の文章では、動作の方向性を表す「を」格を用い、「見る」動詞に「を」がつくことは理解できていますが、「出発」の前にくる助詞が「に」「で」「へ」であったりする。より、動詞の前にくる格助詞に関する知識はまだ不十分であると考えられる。

即ち、モンゴル人日本語学習者にとって、方向性を表す「を」格助詞に対する知識が十分理解できていると考えられる。

番号	例文	正しい答え	学生の答え
T1—Q3	部屋（ ）出る	を、から	を、から、 <u>に</u> 、 <u>へ</u>
T2—Q3	車（ ）降りる	を、から	を、から、 <u>に</u>
T1—Q7	六時に東京（ ）出発する	を	を、 <u>に</u> 、 <u>で</u> 、 <u>へ</u>
T2—Q7	彼女の方（ ）見る	を、から、へ	を、 <u>に</u>

表 6-7 向上した例文について

向上していないもの

①文中における格助詞の位置が同じ、語順が同じであっても、日本語の文章を理解する際に既存の知識を利用してない可能性がある。

例えば、T2—Q13の「図書館（で）勉強する」と例文の「を」助詞はモンゴル語においても場所を表す意味で使われている。

②また、方向性を示す「を」格はモンゴル語に語尾表示されないため、格を落とすか、意味理解不足で他の格助詞と混乱する現状が見られる。「下（を）向く」の例文はモンゴル語には「下 向く」となり、日本語学習者にとって難しい助詞だということが分かる。

③「…会う」の主語は必ず人間であり、何かの目的を持ち行動する意味を持つ。そのため、モンゴル語の目的語を表す「奪格 *ya*」、日本語の「で」と混乱しやすい。「また、[会う]と動詞はモンゴル語において、「見る」という意味で使われ、日本語の「で」格助詞の使い方に影響されることが考えられる。

④好き、嫌い、羨ましいなど感情表現を表す動詞につく「に」「が」と混乱することが見られる。モンゴル語において、[…が好き、…を好き、…に好き]と言い方が存在され、影響を受けて間違えたと考えられる。

T1—Q13	怖い目（ ）見ないでください	で	で、 <u>が</u> 、
T2—Q13	図書館（ ）勉強する	で	で、 <u>に</u> 、 <u>を</u>
T1—Q14	上（ ）見る	を、に、へ	を、に、 <u>で</u>
T2—Q14	下（ ）向く	を、から	を、から、 <u>に</u> 、 <u>が</u>
T1—Q15	彼は父（ ）似ている	に、と	に、と、 <u>を</u>
T2—Q15	恋人（ ）会う	に、と	に、と、 <u>で</u> 、 <u>が</u>
T1—Q17	私はあなた（ ）嫌うことができない	を	を、 <u>に</u>
T2—Q17	皆が彼女（ ）羨ましがる	を	を、 <u>に</u> 、 <u>が</u>

表 6-8 向上してない例文について

格助詞についての考察

学生の答えを見たところ、全ての解答に「が」は入力された傾向が見られる。「が」助詞はモンゴル語で主語の後に「ага」が付く形になり、主格は主格と述語とを結びつける形式を取る。従って、答えが分からない際、モンゴル語の「ага」に対応する「が」に依存し、マイナス転移が起こりやすいだと考えられる。というのは、モンゴル人日本語学習者は格助詞「が」に関する知識は不足され、今後の課題を待たねばならないことも示唆された。

一体多の対応による混乱

「図書館（で）勉強する」はモンゴル語と同じく SOV 語順であった場合、主語が文の最初にきてない例文である。また、「私はあなた（を）嫌うことができない」も同じく SOV 語順で、主語、述語が明らかな例文である。前者は場所を表す「で」を取り、後者は相手を示す「を」を取る。どちらにおいてもモンゴル語には与位格 орон に対応できる。つまり、一体複数の場合において学習者が混乱しやすくモンゴル語に対応する日本語の助詞を判断できないといえる。

中国語文法の影響

中国語・モンゴル語バイリンガルの日本語学習者は日本語の文を理解するに中国語の文法にも影響される。例えば、「図書館（で）勉強する」において、位置を示す「で」格を「に、を」格と間違える恐れがある。「図書館（で）勉強する」の「で」は中国語では「图书馆里学习」になり、「で」に対する「里」は「に」助詞に対応することになってしまう。

6.3 アンケート

6.3.1 日本語の助詞学習に関するアンケート（項目選択式）について
実験参加後、アンケートに記入してもらったの 18 人である。

問1 日本語を勉強している期間を教えてください。

半年以下 1 年未満 1－2 年 2－3 年 3 年以上 5 年未満 それ以上

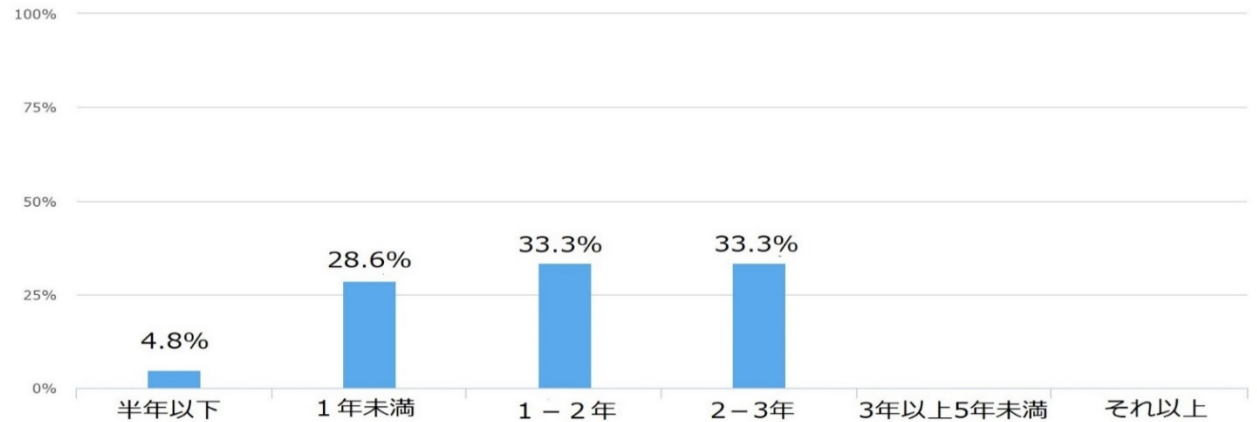


図 6-1 日本語学習期間

問 1 の分析結果、日本語の学習期間は半年より 3 年間、日本語の能力はそれぞれだったことが分かる。(図 6-1)

問 2 日本への留学経験はありますか？

あり なし

問 2 の分析結果、全員は留学した経験が無かったことが分かる。

問 3 正しい答えがわからない場合、どのようにして考えますか？

先に日本語文をモンゴル語に翻訳して考える。

先に日本語文を中国語に翻訳して考える。

中国語とモンゴル語の両方に翻訳して考える

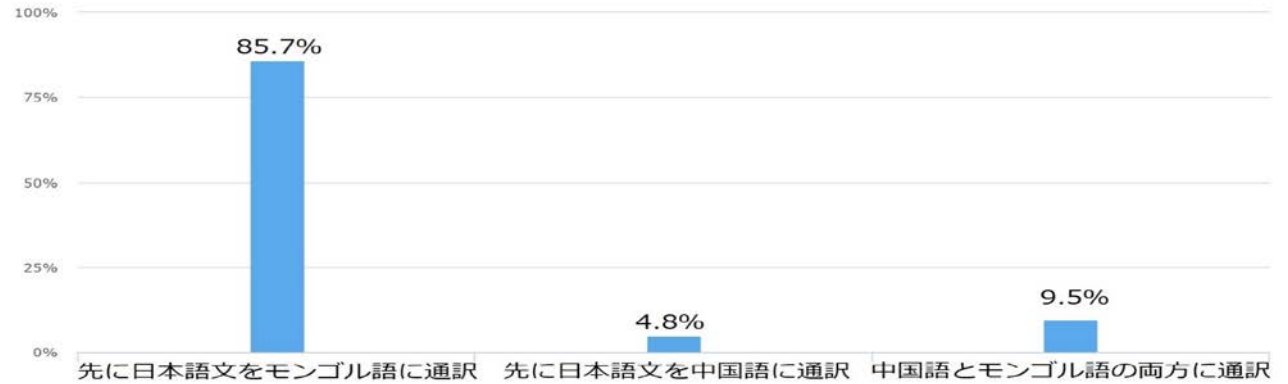


図 6-2 考え順番

問 3 の分析結果、先に日本語文をモンゴル語に翻訳して考える人が 86%だと分かった。(図 6-2)

問4 モンゴル語版の教科書を利用した後、自分の助詞に対する理解度はどうなったと思いますか？
 良くなった 少し良くなった どちらともいえない 少し悪くなった 悪くなった

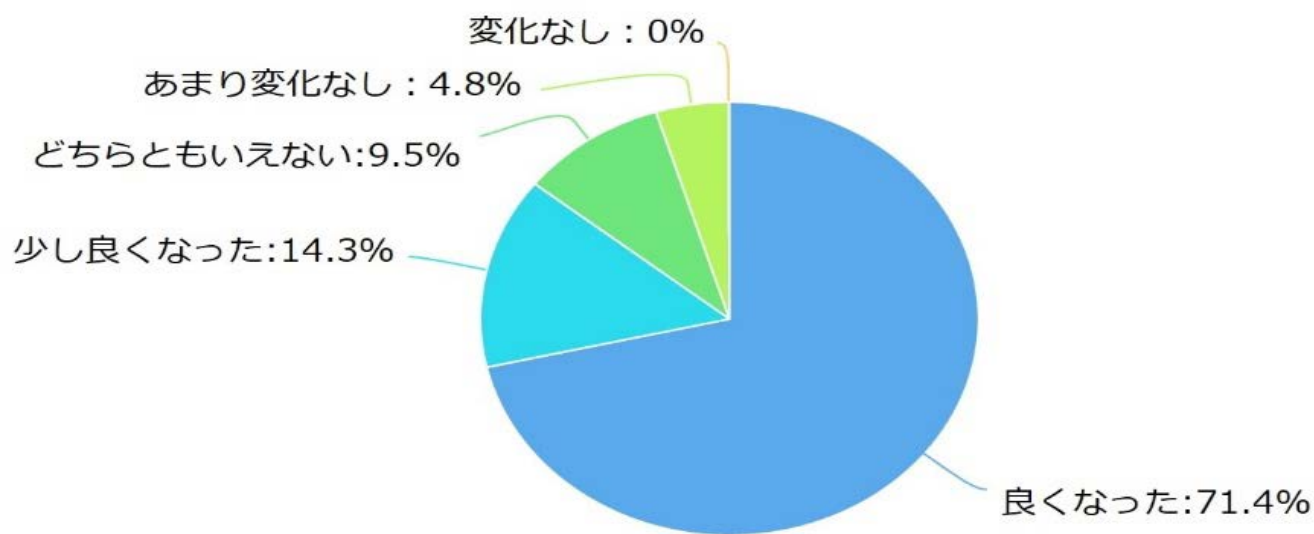


図 6-3 助詞に関する理解度

問4 の分析結果、モンゴル語版の教科書を利用した後、自分の助詞に対する理解度は良かったと回答した人が 71.4 %だということが分かった。

問5 モンゴル語版の教科書についてどう思いますか？
 難しい 少し難しい どちらともいえない 少し易しい 易しい

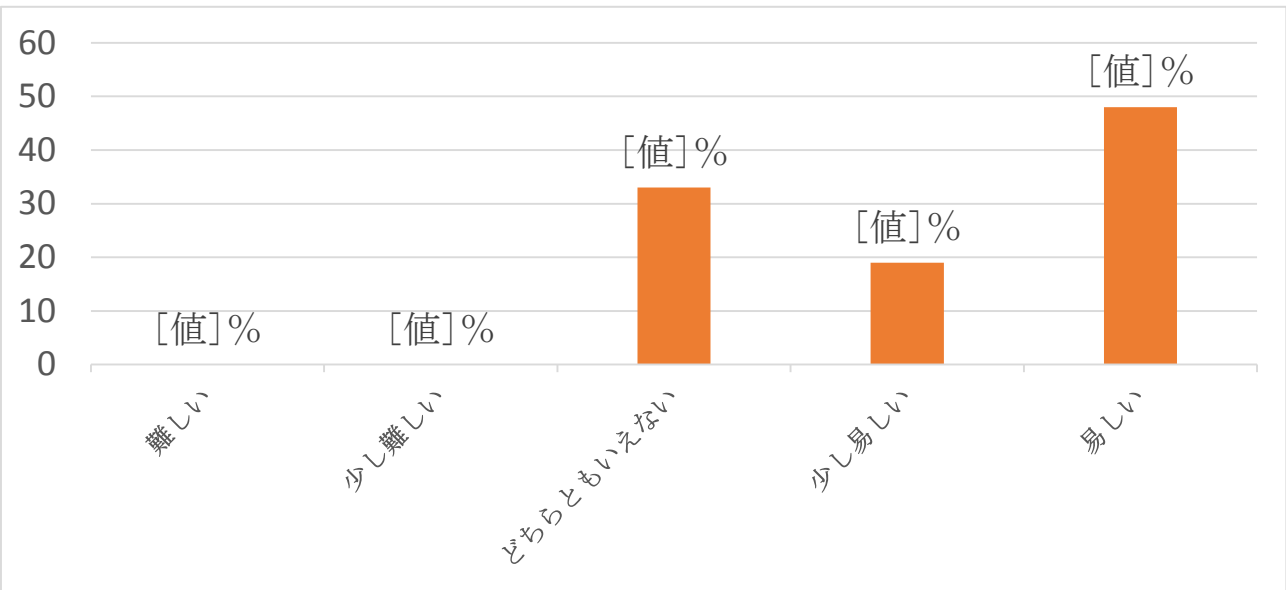


図 6-4 教材の理解度

問5 の分析結果、48 %の学習者は蒙日文法対比学習法が従来の日本語教科書より役に立つと回答し、去年取ったアンケートより高い評価を受けた。

問6 モンゴル語版での教科書は中国語版での教科書と比べてどう思いますか？
 難しい 少し難しい どちらともいえない 少し易しい 易しい

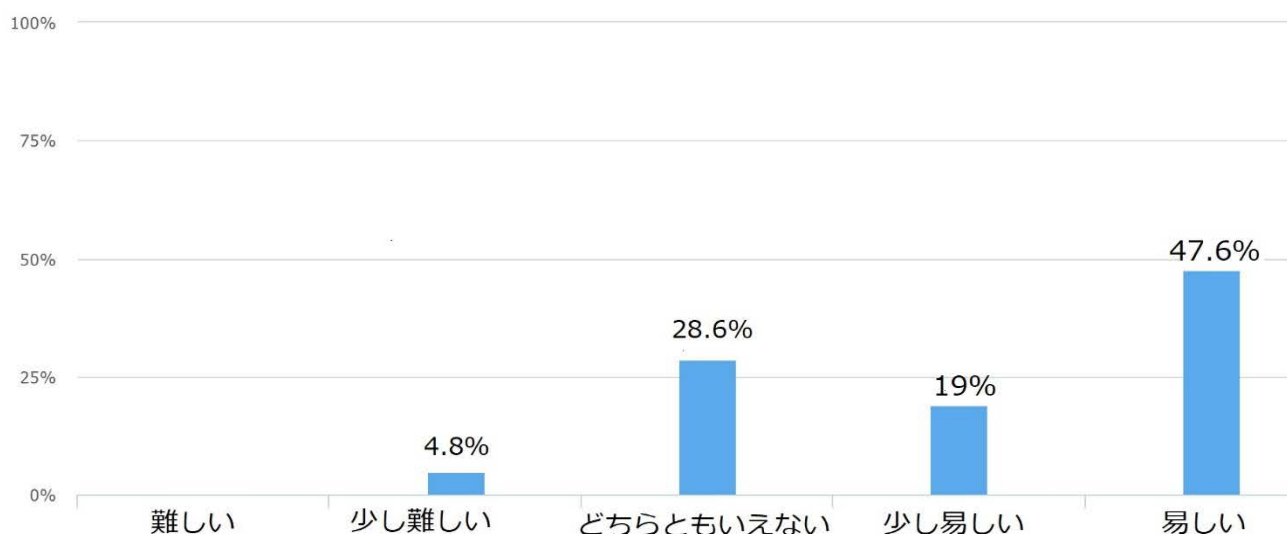


図 6-5 教材のわかりやすさ

問6 の分析結果、モンゴル語版での教科書は中国語版での教科書と比べて易しいと回答した人が 48%だということが分かった。

II. 習得が難しいと思う助詞を以下の中から選択してください（複数選択可）

[は に で を が へ の と も から／より]

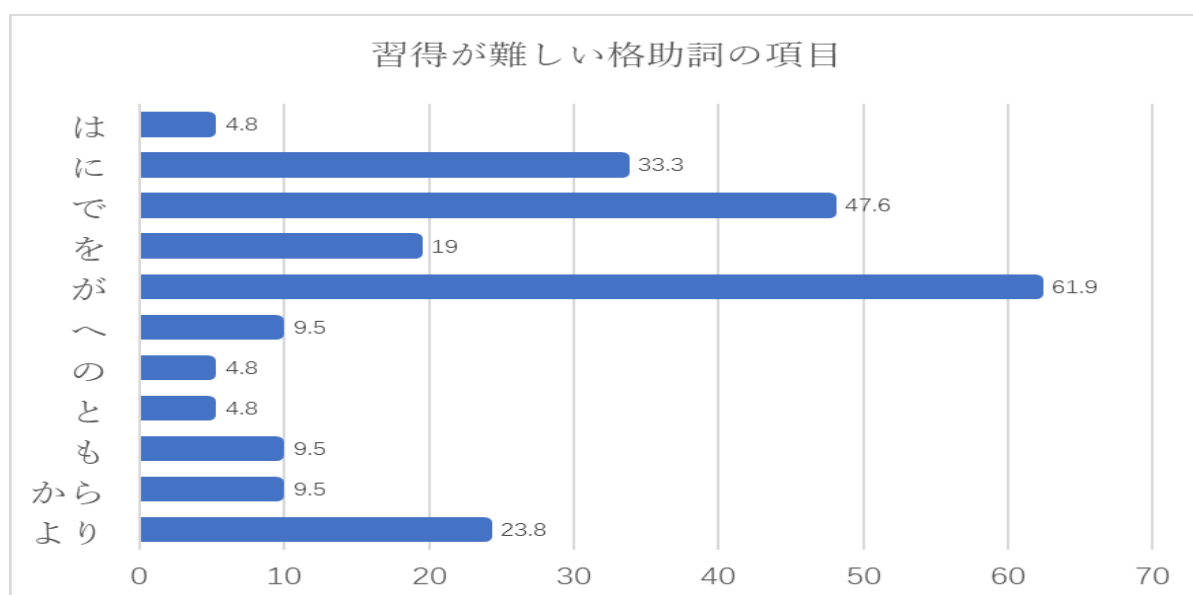


図 6-6 習得が難しい格助詞の項目

問II の分析結果、去年取ったアンケート結果と同じく、格助詞の中で一番難しいと思われるのは助詞「が」である。先行研究に対象ではなかったため、本研究ではでは取り上げた。

6.3.2 日本語の助詞学習に関するアンケート（記述式）について

III. 今回のモンゴル語版の教材について自由に意見、感想をお書きください

简单明了，很不错（見やすくて、よいと思う）

希望能更好的全面（最も全面的に作ってほしい）

非常好！（非常によい）

对于日语初学者来说很适合（日本語初級レベルの学生にとって良いと思う）

挺好理解的。（分かりやすい）

多加一些日常生活中的会话！（日常会話を例として加えた方がよい）

很好（よい）

IV. その他、意見があれば何でも書いてください

个人觉得问卷调查用选择题的方式出题比较好。（個人的に、問題は穴埋め形式より、選択式の方が良いと思う）

意見がありません。ほんとによいと思います。

例子可以多一点（例がより多い方がいい）

使用蒙汉日三种语言更容易理解（モンゴル語、中国語、日本語と三つの言語を使用した方がより分かりやすい）

6.4 結言

実験よりテストの点数・誤解率・例文ごとの評価などの定量的データを取出すことができた。また、アンケート調査から定性的データを取り出すこともできた。

第7章 結論

7.1 まとめ

本研究ではモンゴル語と日本語が類似することに対し、内モンゴル人日本語学習者向けのモンゴル語版の日本語教科書は見当たらない問題点を背景し、格助詞全体のモンゴル語での教材を開発し、その有用性の評価実験を行った。

教材を開発するにあたり、本研究では日本語とモンゴル語の格比較と内モンゴル自治区の日本語学習者を対象にそれぞれ、遠隔調査、現地調査、教科書調査を行った。

また、教材内容として、学習者がより難しいと回答したアンケート結果を元に、格助詞「に」、「で」、「を」、「が」に絞り、伝統モンゴル文字によるモンゴル語文章、縦書きで左から右へと記述した。そして、開発したモンゴル語版の日本語教材が、モンゴル人日本語学習者にどの程度支援できるのかを確認するために評価実験を行った。

実験データの考察結果はテスト成績が上がったり、下がったりする傾向が見られ、学習に対する十分な効果は得られなかった。

一方、アンケートを結果より、約5割の学習者は、母語であるモンゴル語での教材は易しいと考えていることが分かった。

以上より、本研究で開発したモンゴル版の日本語格助詞教材は更なる改善が必要である

7.2 今後の課題

今後の課題として、学習者の誤用頻度が高いパターンを調査し、教材構造改善を行う。特に、点数が下がった例を中心に考察することが課題の一つである。また、アンケート用紙に記入された意見を参加にして、よい例文の選定や対応図などの詳細解説による教材の改善を目指したい。

謝辞

本研究に関して始終丁寧なご指導をいただいた指導教員の由井蘭隆也先生に深く感謝いたします。また、本論文をご精読頂き有用なコメントを頂きました審査委員の西本 一志教授、内平直志教授、キム ウニョン准教授に深謝致します。

また、副テーマを指導してくださった本田 弘之先生は蒙日対照研究に興味深くあることから本研究においても素晴らしい助言、アドバイスを頂き、研究を前に進めることができました。感謝いたします。

本論文の執筆にあたっては、様々なご指導をくださった内モンゴル自治区の財經大学で授業している先輩、並びに先輩の授業を受けていた学生の皆様に、心より感謝しております。また、貴重な時間を割いて実験に協力頂いた内モンゴル自治区のモンゴル人大学生の皆様へ御礼申し上げます。

最後になりますが、今まで一緒に頑張ってきた研究室の皆様と、モンゴル語版の日本語教材を作りにあたって、モンゴル語文字の入力に協力してくださったアルスさんに感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 青格楽図・烏蘭 (2008) 《内モンゴルのモンゴル民族の語学教育事情》、北海道言語文化研究. No. 6, pp. 3-6
- [2] 国際交流基金日本語国際センター (2015) 《日本語教育国別事情調査：中国内モンゴル自治区日本語事情》
- [3] 李晶 (2001) 《日本語教育における日本語と蒙古語の『助詞』の使い方についての一考察》、留学生教育
- [4] 小沢重男 (昭和 53 年) 《モンゴル語と日本語》、弘本党株式会社
- [5] 迫田久美子 (2002) 《日本語教育に生かす第二言語習得研究》、大日本印刷株式会社
- [6] 李晶 (1998) 《内蒙古における日本語教育：フホトにおける教育機関を中心に》、留学生教育
- [7] 鈴木忍 (1978 年) 《教師用日本語教育ハンドブック③文法 I 助詞の諸問題 1》、凡人社株式会社
- [8] 斯日貢・中平勝子など (2016) 《モンゴル人学習者を対象とした日本語格助詞学習法—文法対比学習方法の提案》、教育システム情報学会第 37 回全国大会
- [9] 森まどか (2007) 《青年海外協力隊ボランティア報告書》、JICA
- [10] 小沢重男 (平成 9 年) 《蒙古語文語文法講義》、大学書林株式会社
- [11] エルデネビレグ・ウヤンガ (2009) 《日本語とモンゴル語の格関係の対照》、信州大学国語教育学会
- [12] 国立国語研究所 (1951) 「現代語の助詞・助動詞」
国立国語研究所 (1964) 「現代雑誌九十種の用語・用字」(分析)
- [13] ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ (2002) 《ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ》(日本語助詞解説)、ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ (モンゴル語で記述)
- [14] 内田孝 (2010) 《モンゴル語学習者に対する効果的な格語尾の指導法研究—表を多用した理解促進の試み—》、北東アジア言語教育会
- [15] ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ (1982) 《ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ》(現代モンゴル語)、ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ (モンゴル語で記述)
- [16] ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ (2013) 《ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ》(学生実用蒙古語文法)、ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ ᠨᠠᠨᠠᠨ (モンゴル語で記述)
- [17] 賽音烏其拉図・塔娜 (2013) 《日本語基礎文法》、内モンゴル人民出版社
- [18] 富田隆行 (1992) 《文法の基礎知識とその教え方》、凡人社
- [19] 木村宗男 (1988) 《教師用日本語教育ハンドブック⑦教授法入門》、凡人社

付録 アンケート用紙

日本語の助詞学習に関するアンケート調査 名前[]

I. 次の問 1～問 6 の質問において、最も当てはまる回答に○を付けてください。

問2 日本語を勉強している期間を教えてください。

半年以下 1 年未満 1－2 年 2－3 年 3 年以上 5 年未満 それ以上

問 2 日本への留学経験はありますか？

あり なし

問 3 正しい答えがわからない場合、どのようにして考えますか？

先に日本語文をモンゴル語に翻訳して考える。

先に日本語文を中国語に翻訳して考える。

中国語とモンゴル語の両方に翻訳して考える

問 4 モンゴル語版の教科書を利用した後、自分の助詞に対する理解度はどうなつたと思いますか？

良くなった 少し良くなった どちらともいえない

少し悪くなった 悪くなった

問 5 モンゴル語版の教科書についてどう思いますか？

難しい 少し難しい どちらともいえない 少し易しい 易しい

問 6 モンゴル語版での教科書は中国語版での教科書と比べてどう思いますか？

難しい 少し難しい どちらともいえない 少し易しい 易しい

II. 習得が難しいと思う助詞を以下の中から選択してください（複数選択可）

[は に で を が へ の と も から／より]

III. 今回のモンゴル語版の教材について自由に意見、感想をお書きください

--

IV. その他、意見があれば何でも書いてください

--

付録 一回目テスト及び二回目テスト

() の中ひらがなをいれなさい。(10 分)

名前 ()

- ① 一日 () 三回この薬を飲む
- ② 大雨 () 電車が止まる
- ③ 部屋 () 出る
- ④ 友達 () 聞く
- ⑤ 川 () 渡る
- ⑥ 海 () 泳ぐ
- ⑦ 六時に東京 () 出発する
- ⑧ 弟 () やらせる
- ⑨ この仕事は2時間 () できる
- ⑩ 本 () 読む
- ⑪ 恋人 () 指輪を買う
- ⑫ 先生 () 来ました
- ⑬ 怖い目 () 見ないでください
- ⑭ 上 () 見る
- ⑮ 彼は父 () 似ている
- ⑯ みんな () 料理を作る
- ⑰ 私はあなた () 嫌うことができません
- ⑱ 先生 () なる
- ⑲ 木 () 紙を作る
- ⑳ 空 () 飛ぶ

() の中ひらがなをいれなさい。(10 分)

名前 ()

- ① 信号は赤 () なる
- ② 病気 () 学校を休む
- ③ 車 () 降りる
- ④ 先生 () 本を借りる
- ⑤ 年収 () 聞く
- ⑥ 3時間 () 読み終わる
- ⑦ 彼女の方 () 見る
- ⑧ 服を買い () 行きます
- ⑨ 会議 () 意見を出す
- ⑩ ご飯 () 食べる
- ⑪ 彼は大阪 () 住んでいる
- ⑫ 雨 () 降っています
- ⑬ 図書館 () 勉強する
- ⑭ 下 () 向く
- ⑮ 恋人 () 会う
- ⑯ 全員 () 映画を見に行く
- ⑰ 皆が彼女 () 羨ましがる。
- ⑱ 提案 () 賛成する
- ⑲ 麦 () お酒を作る
- ⑳ 廊下 () 走る

付録 モンゴル語版での日本語教科書